

富有柿の由来

1 居倉御所

西暦1820年(文政3年)頃、当時50代半ばだった小倉ノブが御所柿を家屋に近い場所に植えた。

御所柿が植えられた地域は、美濃国大野郡居倉村(現在の瑞穂市居倉)とされる。村には元伊勢のひとつに数えられる伊久良河宮跡である天神神社があり由緒は神代にまで遡られ、地名の由来にもなっていると思われる。

この神社、もしくは地名にちなみ、植えられた御所柿はいつしか「居倉御所」と呼ばれるようになった。

御所柿とは甘柿の品種のひとつで奈良県御所市が原産とされる。ただし、大きな甘柿の総称として「御所柿」の呼び名が使われ、代表的な品種に晩御所(岐阜)、天神御所(岐阜)、次郎(静岡)、花御所(鳥取)そして、この居倉御所(岐阜)後の富有がある。

1857年(安政4年)小倉ノブの孫に当たる小倉長蔵が居倉御所の栽培を開始した。

1853年(嘉永5年)アメリカ合衆国海軍ペリー提督が浦賀に来航、翌年1857年(安政4年)には日米修好通商条約が締結された。時代は維新前夜、幕末の風雲が立ちこめる時勢であった。

2 福島才治

大政奉還の2年前、西暦1865年(慶長元年)美濃国大野郡居倉村2番地所に骨董商を営む父・福島青柴と母・阿さのの一子として福島才治は生まれた。

幼少の頃、明治維新の風を受けて育った才治は才知にあふれ、文化を理解する意欲的な青年に育った。

1882年(明治15年)17才の才治は医師を志し、岐阜病院の実習生となった。しかし、健康を害し、医師の道を断念。もとより、志しが高い青年であっただけに、無為に時を過ごすことは苦痛にほかならなかつたろう。

そのような折りの1884年(明治17年)才治は小倉長蔵が所有する御所柿の枝で初めて接ぎ木を試みている。この時期には一般に柿栽培は普及していたが、小倉家の居倉御所は特に優れた柿として話題になっていたと言われる。

才治が22才となった、1887年(明治20年)家督を継いだ後、持ち前の探求心で柿栽培の研究を開始。1892年(明治25年)この時代に頻繁に行われていた品評会に出品。見事、1等に入選した。

前述のとおり、才治の父親は骨董商を営んでおり、家督を継ぐ時に家業として引き継がれている。農地はなく、宅地の敷地内で柿を栽培していた。

1895年(明治28年)30才となった才治は不破郡長松村富田貫誠の二女みさと結婚。その後三男三女の父となる。

書や俳諧に優れ、山高帽を被り白足袋姿で人力車で往来するなど、才治はこの地域の中では特異な文化人的存在であったと言われている。

3 「富有四海」

日清戦争(1894～1895年)の勝利に沸き立った直後の1898年(明治31年)、岐阜県主催の品評会が開催された。

才治はこれに出品するに際して、以前より考えていたことを実行に移している。

それは、同じ特性の品種と見て取れるにもかかわらず、「居倉御所」や「水御所」、「ゴネリ御所」など各地で異なっていた柿の名称を統一しようとするものであった。

「福寿」「富有」の2案を持って、当時親交のあった川崎尋常小学校校長、久世亀吉に意見を求めた。注1

久世は「富有」の採用を薦め、古典「礼記」の一節を説いた。

すなわち、「子曰、舜其大孝也興、徳為聖人、尊為天子、富有四海、宗廟饗之、子孫保之伝伝」注2であり、素質が備わっているものには自然に全国に広まる天の助けがあると解説した。

才治は「富有」と命名し、この年の品評会に出品。見事、1等に入選している。

注1 この他、興津園芸試験場長の恩田技師の吟味を得たとする説もある

注2 意訳：舜はまことに偉大なる孝の徳を修めたる人である。さればその徳といえば、仰がぬ人のない聖人であり、その尊さはもっとも貴い天使の位についてあまなく天下を治めた。また、その死後は宗廟に手厚くまつられ子孫が代々そのまつりをついで行った。

御身の輝かしい善徳は人民から慕われ、誉められ、さいわいを天から受けなされる。

翌1899年(明治32年)、岐阜県農会主催の第1回蔬菜果実品評会に出品し1等に入選。これを当時の岐阜県知事(野村政明)に認められ、県の柿における奨励品種となった。

4 献上の栄え

1903年(明治36年)、岐阜県農会第2回蔬菜果実品評会が開催された。

審査委員長として農商務省農事試験場長である恩田鉄弥が審査に当たった。これを遡ること6年前の1897年(明治30年)、皇太子(後の大正天皇)が岐阜県に行啓の折、「天神御所」が献上されている。恩田も当初はこの天神御所に期待して来県していたが、富有柿の出品の多さに驚いたという。

出品点数1,106にもおよぶ農産物の審査の最中であつたが、急遽、恩田は試験場に戻ることを余儀なくされた。理由は宮内大臣と農商務大臣が揃って園芸試験場に来場されるためというものであった。

このとき、審査員であつた田中栄助(岐阜市)が機転を利かせ、各部門で一等になった農産物を両大臣の試食用として園芸試験場に急送した。

送られた農産物は富有柿、蜂屋柿、梨、島大根、守口大根、飛騨ねぎであつた。

事は成功し、結果、両大臣から富有柿と飛騨ねぎ(味噌焼き)が賞賛された。特に富有柿については後日、天皇に献上しよう大臣から県知事に対して連絡された。

そして明るく1904年(明治37年)、富有柿1籠が初めて天皇家に献上されている。

その後、富有柿の献上の栄えとしては、1911年（明治44年）に馬淵久雄によって明治天皇が福岡県行幸の折、道中で献上しているほか、1928年（昭和3年）には昭和天皇即位に伴う大嘗祭において松尾松太郎（後述）から献上されている。

5 その後

それまで、柿の木は家宅の近くに数本程度植栽されることが多かったが、1907年（明治40年）現在の本巢市郡府に住む松尾勝次郎が才治から20本の苗木を買い受けて1カ所にまとめて植栽。

翌1908年（明治41年）には同じく現在の本巢市郡府に住む松尾松太郎が才治から50本の苗木を買い受けて植栽を開始した。

以降、郡府一帯の農家では在来種からの切り替えにより、いち早く富有柿の産地化に成功している。

後に、松尾松太郎が昭和天皇即位に伴う大嘗祭で富有柿を献上していることは前述のとおりである。

富有の名声が高まるにつれて、全国的に関心が高まり、明治の末期から大正年間に掛け、南は九州、北は東北・朝鮮まで穂木の注文が殺到した。

才治は農地を持たなかったため、自宅の敷地内で苗木を生産するとともに、富有の宣伝・普及に努めた。小倉長蔵の子、小倉初衛も原木を引き継ぎ、穂木の領布を行った。

1919年（大正8年）福嶋才治は病のため逝去した。享年55才。

富有柿の原木は1929年（昭和4年）所有者である小倉初衛の家屋新築のため、3月に移植されたが、その夏、ついに芽が出ずに枯死した。^{注3}

現在は「富有柿発祥の地」の碑とともに、母木が現存するのみとなっている。

注3 翌年、根元から芽吹いたとする説もある。

出典：『富有柿とその原木』小倉淳一編

『富有かきの由来』第18回全国かき研究大会岐阜県実行委員会編

『富有柿の由来』岐阜県本巢郡巢南町（現・瑞穂市）作成